2022 年度（後期）海外渡航助成金成果報告書

防災科学技術研究所　JSPS 特別研究員(PD)
三反畑 修

2023 年 1 月 30 日から 2 月 3 日まで, New Zealand(NZ)北島のカルデラ湖畔の街・Rotorua で開催された，世界最大の火山学に関する国際学会・IAVCEI（国際火山学及び地球内部化学協会)の Scientific Assembly 2023 に参加する機会を頂きました．四年に一度開催される本大会は，コロナ禍の影響による二年間の延期を経て，2017 年以来六年ぶりの開催となりました．世界中の火山学者が待ち望んだ大会だったようで，多くの魅力的な研究発表に加えて，多様な交流イベントや，同国が誇る火山地帯への会期前後の巡検が企画されていました．

本学会への初参加となった私は，光栄なことに”Early-Career Researcher（ECR）Plenary Session”という若手研究者の基調講演の登壇者四人のうち一人に選出され，「カルデラ特有の火山性地震による津波生成機構」について発表する機会を受け，大きな緊張と期待を抱え，NZ を目指して飛行機に飛び乗りました．

しかし，その旅路は思わぬ暗礁に乗り上げます．降水量が少ないはずの夏の NZ で，主要都市 Auckland が歴史的な豪雨に見舞われ，大規模洪水によって Auckland 国際空港が数日の間，その機能を停止したのです．Singapore からの私の乗り継ぎ便も例外でなく欠航となり，同国への緊急入国・待機を余儀なくされます．NZ 最大空港閉鎖による航空会社の混乱は散々で，振替便に関する有益な情報は届かず，電話サポートも全く繋がりません．経験のない緊急事態で不安が募る中，学会開始は時々刻々と迫ってきます．（同じ頃，多くの参加者が世界各地の道半ばに放り出され，某 SNS では #IAVCEIstranded = ”IAVCEI で立ち往生”というハッシュタグ付きで, 各地から各々の状況を報告するというムーブメントが発生するほどに.）先の見えない状況に一度は帰国を本気で考えたものの，会期 2 日目に予定されていた私の基調講演の日程が，ECR 委員と別の登壇者の助けで，最終 5 日目への変更が決まったことで，航空会社の対応を待たずに航空券を別で再購入し，再び現地を目指す覚悟を決めました．その時点では航空会社からの金銭的補償などについて情報もなかったため，新たな航空券の購入ボタンを押す手は震えていましたが，千人規模の国際学会での基調講演という，またとない機会を逃せないという気持ちが自分を突き動かしました．

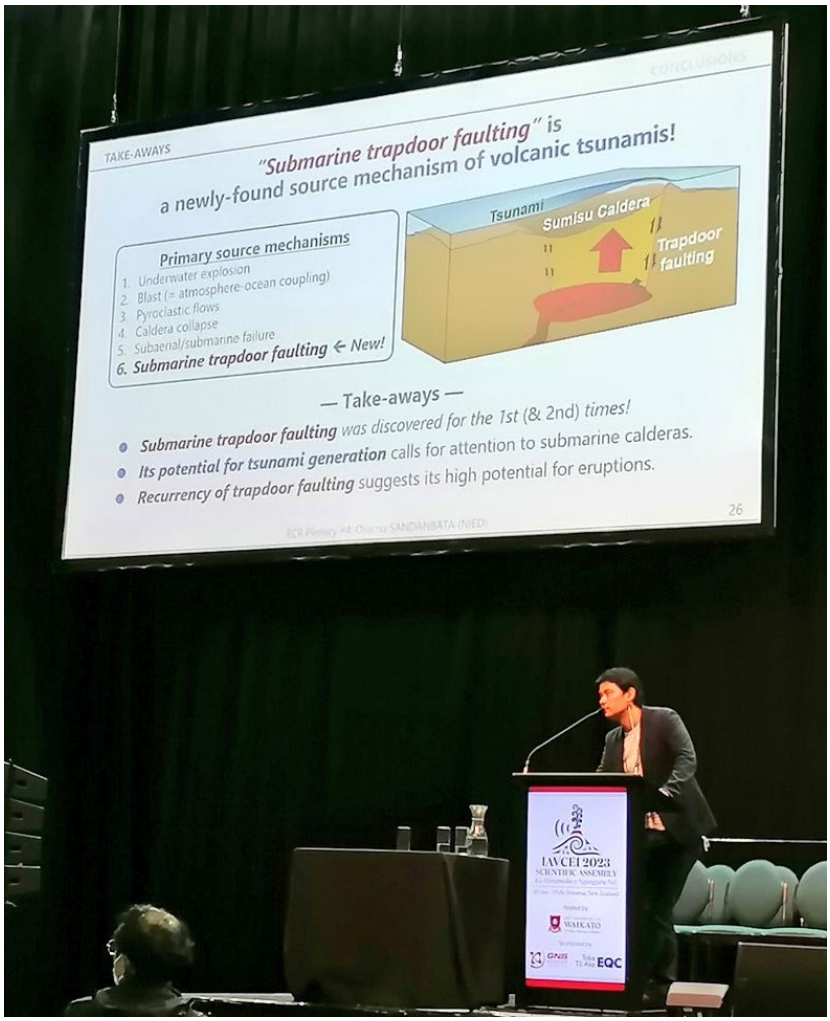
そうして，新たな旅程がうまくいくことをただ祈りながら，会期 2 日目までは Singapore からオンラインで学会参加，２日目の夜に同国を発ち，Australia 経由で復旧した Auckland 国際空港から NZ 入り，さらに長距離バスへ乗り継いで，4 日目の昼過ぎについに Rotorua に無事に到着しました．熱水活動に伴う硫黄臭が漂う学会会場では，私の立ち往生の噂はすでに広がっており，多くの方々に労わりのお言葉で迎えて頂きました．

そして，最終日の基調講演．現地会場には四〜五百人はいたでしょうか，多くの火山学者の目の前で，無事に講演を行うことができました．自宅を出発してから 6 日と 3 時間をかけて現地に到着した私を大きく歓迎してくださり，「昨日の午後到着したけど，明日には日本

に向けて帰らないと」という悲劇（喜劇?）には，大きな笑いと拍手で会場が包まれました（こんな経験は二度とないでしょう・・）．発表直後には，関連現象を研究している研究者たちから声をかけて頂き，深く踏み込んだ議論を行うことができました．公演後も会場内で“Great talk!”と何度も声をかけてもらうなど，期待をはるかに超える反響があり，長く不安な旅路の苦労はすべてが報われる，忘れられない一日となりました．

この学会で強く印象に残ったのは，困難な状況の中でポジティブに協力し合う，火山学の研究者コミュニティーの姿でした．例を見ない災害による影響の中，多くの参加者がポジティブに状況を共有しあい，バスやタクシーの相乗り情報を共有するフォームが作られたり，互いの苦労を心から労わりあったりと，この連帯感が素晴らしい学会の雰囲気を作り上げていると感じました．こうした雰囲気がなければ，足止め中に下した私の決断も大きく異なっていたように思います．

最後に今回の渡航に際して，カルデラ火山研究における地震学と火山学の密接な関係を評価して本助成を承認してくださった，日本地震学会の審査委員会・事務局の皆様，欠航が決まった時から情報収集を助けてくれ，再渡航を後押ししてくれた地震学会同期の栗原亮氏と伊東優治氏と金木俊也氏，そしてご心配・激励の言葉を送ってくださった皆様に，心から感謝申し上げます．ありがとうございました．



著者の Early-Career Researcher (ECR) Plenary Talk の様子.